

第八回宗教法学会・報告

ロシアにおける聖母マリア崇拜

霜田美樹雄

(早稲田大学)

まえがき

さきに、「風土と宗教、とくにスラブ民族（ロシア人）の場合について」で報告したが録音筆記を読むと散漫なので、整理をして要点のみをまとめ、ご参考に供したい。

問題はその社会の文化、とくに宗教信仰のあり方が風土の影響をうけ易いということである。私はたまたまスラブ民族（ロシア人）のキリスト教信仰のあり方についてとり上げたが、そのさい、避けて通れないのが和辻哲郎氏の風土論である。

同氏はその著『風土』『倫理学・下巻』において、いままで世界史の舞台に登場した人間存在の風土性を区分して、モンズーン型、砂漠型、牧場型、アメリカ型およびステップ型としたことはそれなりの意義をもつものであり、これを出発点とすることに異存はないが、問題は次の点である。同氏によれば、現代社会を支配する三大世界宗教の二つまでが、つまりキリスト教とマホメット教がいずれも砂漠型風土の所産であるとの指摘は正当であるとはいえず、それが何故、そして如何に世界に広まったか、についてはほとんど言及されていない。私はこの異文化の受容

の問題、習合(syncretism)の問題について焦点をしばり、とくにロシアのキリスト教の習合について考えたいと思う。ここで習合(シンクレティズム)という用語はユダヤ教やキリスト教では正統に対する異端、あるいはそれに近い極めて悪意のある、暗いイメージとして使用されているが、私は異文化の宗教をそれぞれの風土性において受容定着させることを意味する積極的イメージとして使用する。

いずれにしても、同じような手法で、今後われわれ日本人が自身の宗教信仰にかかわる問題、たとえば靖国問題とか、あるいは日本はなぜキリスト教が全人口の〇・五パーセントしか広まらないのか、同じモンスーン型に属する韓国では総人口の三〇パーセントがクリスチャンであり、さらに、フィリッピンでは九四パーセント以上がカトリック信者——大部分実質的にはマリア崇拜教——であるのか、あるいはキリスト教だけでなく、他の宗教を広めるためには如何にすべきか、逆に、それら宗務行政にかかわる問題をどう処理するか、などを考えるさいの参考になれば幸いである。

一 スラブ民族の中のロシア人

一 ロシア人の性向

ところで、国連統計局『世界統計年鑑』(一九八一年)によれば、ロシア(ソ連邦)はまことに広いの一語につきる。二四〇万平方キロという世界最大の領土に二億六二四三万人の人口をかかえている。一平方キロ当たりの人口密度は一二人である。これに対し、日本は三七万平方キロの領土に一億一六九〇万人住んでいるから、人口密度三一人で、ほとんど比較にならない。

このロシアをふつう、ヨーロッパ・ロシアとウラル以南のシベリアに区分する。ここでは前者を中心に話をすすめたい。その人口一億八〇〇〇万人、面積五四五万平方キロ、したがってヨーロッパ・ロシアだけの人口密度は三人となる。如何にこの地域に人口集中をしているかがわかる。そして、この地域に東スラブ民族といわれる人々がだいたい住んでいる。

いま、D. Barrett, *World Christian Encyclopedia*, (1983) によれば、一〇〇万を超える世界の言語別人口で、ロシア語一億四一六〇万人、ウクライナ語四四八三万人、白ロシア語九八〇万人で、この東スラブ民族の総計は一億九六〇〇万人余となる。もつとも、この人間がすべてヨーロッパ・ロシアに居住している訳でなく、前者の数字とズレがあるのはやむを得まい。

なお、他のスラブ民族をこの表で見ると、西スラブ民族といわれるポーランド語三九三〇万人、チェコ語一〇〇〇万人、スロバツク語五〇〇万人、また南スラブ民族の主力を構成するセルボ・クロアイト語一七二〇万人で、ブルガリア語は七九〇万人である。また、スラブ民族ではないが、いわゆる東ヨーロッパ社会主義圏のルーマニア語一九〇〇万人、ハンガリー語一四〇〇万人となり、これを前記統計年鑑と対照すると東ヨーロッパ諸国家内に相当数の異言語民族が混在していることがわかる。

ひるがえって、東ヨーロッパは言語別で見ても東スラブ語族が圧倒的に多いことがわかるし、この中のウクライナ語、白ロシア語などは東京弁、大阪弁の違いぐらいだから、これはすべてロシア語族とみなして差し支えない。この意味からも、スラブの代表としてロシア人をとり上げてあまり異存はないだろう。

もつとも、それはこれらスラブ語民族がすべて同一性向をもち、つねに連帯と団結を示しているからではない。むしろ逆に、社会的歴史的宗教的諸事情から相互に敵対関係にあつたことが多いくらいで、たとえば、ロシア人と

ポーランド人の確執はその最たるものである。

一七世紀ポーランドのロシア内乱への干渉は失敗に終わったが、逆に、一七九五年ロシアはプロセイン、オーストリアと組んでポーランドを分割滅亡させ、この新ロシア領土にロシア化政策を強行した。カトリックは強引にギリシャ正教に改宗させられた。第一次大戦後、独立によってこの苦しみから解放させられたものの、第二次大戦後、領土縮小、ロシアによる社会主義干渉に苦しんでいる。

同じことは南スラブ民族をはじめルーマニア人、ハンガリー人の住むバルカン半島についてもいえる。ロシアはギリシャ正教徒保護の名目でなされた汎スラブ主義の南下政策で度重なる露土戦争の結果、一九世紀末に前記諸民族のトルコよりの独立をかちとらせた。だが、その過程における乱暴狼藉ぶりはマルクスによるバルカン諸通信にくわしい。もつとも、この通信はその後エンゲルスの著作であることがわかった。

これは第二次大戦後でも同じだ。たとえば、私がハンガリーの首都ブダペストに行つたときのことである。高い丘の上にひととき巨大なモニュメントがある。だが、名所案内図にもない。ホテルのフロントにきいても知らないという。知らないはずはないだろう。目の前に聳え立っているのだ。そこに出かけてわかつたことは、ハンガリー解放のため当地で戦死したソ連兵士だけの慰霊塔であった。誰もハンガリー人はそこへ行きはしない。これはハンガリーだけでなく東欧諸国すべてに、それぞれの国家負担で造らせてある。こんな異民族の感情を考えないやり方があるだろうか。それは丁度、戦前のファシズム日本が朝鮮神宮、台湾神宮、南洋神宮を建立し、現地人に強制的に天照大神を崇拜させたのと極悪の好一对である。

かくて、東欧社会主義諸国は建前は友好と団結、内実はロシアへの憎悪と反目である。なお、ブルガリアだけは特殊な歴史的事情で別である。

二 ロシア人の生活

さて、ヨーロッパ・ロシアにおいて、気候は一般に寒い。たとえば東京天文台『理科年表』（一九八三年）によれば、レニングラード、モスクワ、キエフはいずれも一月から翌年三月まで月間平均気温は氷点下であり、それゆえ、耕作期は一般に四、五月から九、一〇月までである。だが、皮肉なことに、播種期三カ月は雨が少なく、逆に収穫期三カ月に雨が多い。そして年間降水量五五九、五七五、六一五ミリで、わが国の平均半分以下で極めて少ない。さらに耕作条件を悪化しているものに土質がある。キエフ以南の森林ステップとステップ地帯は黒土地帯（チェルノジーム）といわれて肥沃であるが、混合樹林地帯（モスクワ）、タイガ地帯（レニングラード）は一般にボドゾール（含塩灰白土）といわれ、痩せた土質をむき出しにしている。もちろん、それ以北のツンドラ（凍土）地帯は論外である。

ところで、人間は誰でもそうだがロシア人も、土地が痩せていても、いや、痩せているがゆえにいつそいいとおしく、彼らをはぐくんだ大地に愛着を感じている。かくて、彼らはその痩せた土地をどのように耕作してきたか。まず、耕作方法としては土地の寿命を延命させる三圃制度を自然に採用した。また、耕作期を有効に利用するため、集団的組織体系の家父長制が維持された。そして農村生活形態としてはミール共同体を形成した。もつとも、黒土地帯はフートル・オートルプ（独立自営農民）が多かったことを付記しておく。

ミール共同体とは何か。それはその起源、広まった年代と地域、その態様について、現在でも学界の大きな論争題を提起しているものであるが、それを保田孝一氏の名著『ロシア革命とミール共同体』をてがかりとして、あえて簡約すればつぎのとおり。

ロシア人は土地はもともと神様から賜ったもの、神様のものと考えていた。その痩せた土地と自然的条件のもとでは、自ら、働かざる者は食うべからず、という勤労原理、相互扶助と平等原理を涵養した。つまり、乏しいもの

を民主的に平等に分かち合う精神から数年毎に耕作地の定期割替(チヨールヌイ・ペレジュール)が行なわれた。この社会的経済的共同体は自治組織としての郷とも、宗教的な教区とも原則的に一致していた。かくて、ロシアにおいては、私的所有権の意識は発展せず。共同体としての所有権のみが定着した。これは私的所有権の発展のうえに個々の自覚、個人の自由権を確立し、近代市民社会を形成した西ヨーロッパと根本的にことなる点である。

この項の最後に、現代ロシア(ソ連邦)社会におけるマルクス・レーニン主義にもとづく、いわゆるコルホーズ、ソフォーズ生産と右のミール共同体とのかかわり、社会主義思想と宗教のかかわりの問題をのべねばならぬが、詳細は拙論該当箇所を見て頂くとして割愛し、結論から言えば、いずれもステツプ型風土の影響をうけて、オーバーな表現では同一機能と断定して、さして間違いではない。そこで、現代の宗教信仰をのべることはいろいろさしきわりも考えられるので、一世紀遡及して、以下は一九世紀のロシアについて主としてふれてみたい。

二 神の母崇拜

一 母(女)神崇拜

神の母(ボゴディツ)崇拜の特性についてのべてみたい。

これはイエスス・ハリストス(イエス・キリスト)を生んだ聖母(生神女・童貞女)マリアを崇拜することである。だが、キリスト教の主要な教義書たる聖書正典(旧約三九巻、新約二七巻)のどこをさがしても聖母マリアを神として取り扱っていない。マリアの聖書の中での位置づけは、これを芝居にたとえれば、ただ舞台をかけぬけるだけのチョイ役にすぎない。ましてや、神様扱いなどんでもない、と思う。だが、神を生んだ人間としての母が、神として、

聖母として崇拜されるのはなぜだろうか（正しくは依然として神でない）。

もちろん、この特性はスラブ民族、ロシア人だけのものではなく、古くその起源はローマ時代にさかのぼる。エリアーデなども指摘することく、もともと古代の農耕社会においては、一般に生産と豊穡の守護神として母（女神）崇拜が行なわれていた。もつとも、いろいろな特殊事情からの例外はある。たとえば、古ローマ初期では、三月から九月までの農業生産と収穫期は同時に食糧争奪の戦争期でもあったので、生産と戦争の守護神としてマルス神（男神）が崇められた。

ついでながら、ローマの暦日はこの三月が一年の始まりで、マルス神の月といい、英語で March はそれに起源する。また九月はそれから数えて六番目の月であり、英語 September は文字どおりそれに起源することからもうなづけよう。なお、現行の一年のはじまりをヤヌス神の月、英語で January にしたのは紀元前四五年執政官カエサルによつてである。したがって、新暦は紀元前四四年からである。

ところで、争奪戦たえ間ない武装都市国家ローマで、右のように生産と戦争の守護神をマルス神（男神）としたのはやむを得なかつたが、これを司祭する神官がサリ（Sali）という巫女（処女）であつたことは、そこに何らかの妥協があつたのではないか。

このほか生産と豊穡の古神として、起源のわからないサトウルヌス神（男神）、英語で Saturn がおり、この儀典、儀式の多くが現在のキリスト教のそれに伝承されていることで知られる。

ローマにおいて生産と豊穡の守護神をケレス女神（ギリシャ名デメテル女神）としたのは共和政中期である。この頃になると、初期の都市国家から次第に実質的な地域国家に拡大し、耕作方法も初期的ラティフンディウムが採用されたことが、カトー『農業記』という記録などに見られる。

また、いわゆる身分闘争の終結以前に、ケレス神を司祭する神官として保安官職(*episkopos*)が平民より選任されることになったことは、ローマが農業国家として意識してきた証拠といえよう。

紀元前三一年、アクティウム戦に勝つてからローマは地中海をかこむ世界国家に飛躍するわけであるが、領土が拡大するなかで、イシス女神はじめ、それぞれの地方の生産と豊穡の母(女神)神崇拝を許容していた。

ところで、周知のごとく、三、四世紀にかけてローマ世界ではキリスト教とミトラス教が教勢を拡大し、互いに覇を争った。だが、両教とも砂漠のきびしい遊牧神(天なる父男神)に起源するがゆえに、農耕社会に伝播定着するにさいしては、何らかの形で母(女神)神崇拝を習合しなければならなかった。

ミトラス教は多くの場合、それぞれの地方母(女神)神と併合信仰されたことが出土遺跡資料で認められるが、キリスト教は聖母マリア崇拝を前面におし出した。

二 西ヨーロッパのマリア崇拝

五世紀にコンスタンティノポリス総主教ネストリオスは聖書にもない神の母(テオトコス)をしりぞけたため、反対に四三一年エペソス会議で異端として追放されたことは有名である。

さて、キリスト教において母(女神)神崇拝という異教の習合にさいして、つまり、聖母マリアの神への実質的昇格に当たっては歴代の聖職者たちの多くの説教、論文、祈禱文、讃歌などの集積によつて教義の欠落が補完された。

ここで一言、宗教の教義とは何か、についてふれておく。まず、文書化された教義書だけが正典であるか否か論議の分かれるところであるが、一般には、キリスト教の原始教会にも見られるごとく、まず最初に宣教があつて、その主要な粗筋を文書化したものが聖書である限り、それは教えのすべてではなく、キーポイントにすぎないと理

解すべきだろう。だから教義はたんに聖書正典に限らず、それに付帯する祈禱文、儀典諸式で補完されるべきだ、と思う。

話は少し異なるが、これを法体系で説明しよう。日本の法律は憲法典、民法典など主要なものは成文法で構成されているが、これだけではなく、多数の判例、慣習、条理などいわゆる不文法規で補完されて初めて機能する。英米法など不文法主義中心の諸国はこの逆構成である。

ところで、話を前にもどして、右のような努力は中世のキリスト教会をも特色づけるものであり、一〇五四年東西教会への分裂以後も変わらなかったばかりか、その後裔としてのローマ・カトリック教会やギリシャ正教系の、たとえばロシア正教会などにも聖母マリア崇拜は脈々と生きつづけている。

なお、ローマ・カトリック教会は近代にいたって、信仰の自由の闘争によるプロテスタント諸派を分派した。彼らの多くは聖書に忠実であることを旨とするがゆえに、神の母を原則として認めていない、ことを付記する。

先に私は、教義をどのように規定するかは論議の分かれるところだ、と言ったが、成文の聖書に盛りこまれたことだけが教義とするという決め方も、それは信仰の自由なのだから大いに結構なことである。

ここで、少しオーバーな表現を許して頂くとすると、近代ヨーロッパにおいて、このようにカトリックとプロテスタントの間で、教義の解決のずれが出てきたということ、そしてこれも少しオーバーな表現をすれば、プロテスタント信者が比較的、新興の中小手工業マニファクチュア階層に多く、つまり、既存の牧場型農耕社会から直接的には離脱しつつある階層に多かったことを知るとき、それはヨーロッパ近代化社会の変動の反映であり、別言すれば、変化した生活環境風土の所産といえないことはない。

この項の最後に一言。聖母マリアの祈禱文讃歌の一つ『アヴェ・マリア』は西ヨーロッパでは、古来、ラテン語

の祈禱文に多くの人々の作曲が付され、近代にいたって、プロテスタント信者の中からも現代各国語訳で多数の人々の作曲があらわれ、各教会でも演奏会でも良く愛唱されている。また、ギリシャ正教系ではギリシャ語ないしロシア語で単旋律の斉唱として歌われている。

三 ロシアのマリア崇拜

一 ドストエフスキー

近代ロシア文学の中で、この聖母マリア崇拜はどのように扱われているだろうか。それをドストエフスキーとトルストイについてふれてみたい。

まず、ドストエフスキー『罪と罰』。これは金貸し婆の因業ぶりに怒った大学生ラスコリニコフが彼女を殺して社会正義を貫いたと思つたが、すぐその信念はゆらぎ、不安と苦悩にみちた悪夢の日々がはじまり、自首に終わるといふ長編心理描写小説である。

ラスコリニコフへの母からの手紙の中で、「……その翌日の日曜日に早速会堂にのりつけて、マリア様の前に跪くと、自分がこの新しい試煉に耐えて、自分のつとめを果すだけの力を与えて下さるよう涙を流して祈りました」(第一編三)。

退職官吏マルメラードフの遺児ポーレニカとラスコリニコフの会話。「……お母さんについて声を出してするのはじめは聖母マリア様に」(第一編七)。

ラスコリニコフの告白をきいて、ソーニヤは「……身を屈めて、まずあなたが汚した大地に接吻しなさい……そ

うすれば神様があなたに生命を授けて下さいます」(第五編四)。

『カラマーゾフの兄弟』はいろいろな性格をもった多様な人物描写がすばらしい。その中のゾシマ長老の思ひ出話をアレクセイが覚書にした中で、ゾシマがまだ俗人のとき、「……余はいきなりどうとばかり聖像の前に膝まずいて、靈験あらたかな保護者たる聖母マリアに、彼の身の上を泣いて祈った」(第六編一—D)。

ゾシマ長老の訓話の中で、「……もし、すべての人が自分を見捨てたうえ、無理無体に自分を追い払ったら、そのときはただ一人になって大地に倒れ、土のおもてに接吻して、涙で土をぬらすがよい」(第六編三—H)。

これらはロシア農民大衆の地母神信仰、マリア崇拜をよくあらわしている。かくて、彼らは大地に立っているのだ。

二 トルストイ

つぎに、トルストイについて。まず、『戦争と平和』。これはナポレオン戦争を扱った歴史小説だが、ボルコーンスキ一家の若公爵アンドレイの軍務での活躍、とくにアウステルリッツからボロヂノ大会戦までを主軸とし、ナターシャとの恋愛、婚約、連隊長として戦線での重傷、ナターシャの看護の中の死をめぐる多彩な愛憎の人間模様を描いた一大長編ロマン小説である。

ついでながら、この題名は正しくは『戦争と共同体』である。というのは、トルストイの原稿と初版本は旧正字法でそのように書かれ、組まれている。ロシア革命後、ソビエト政府は一九一八年一〇月一五日から現行の新正字法に改正した。これは綴りが簡素化されて結構なことだが、たまたま平和という用語と共同体のそれが同一の綴りになってしまった。翻訳するとき、念のため初版本を見ておけば、どうということもなかったのだが、うっかりミ

スで誰かが平和と誤訳した。一犬虚を吠れば、万犬実を伝うのたとえで、今や、ロシア語版を除くほとんど世界の各国版が『戦争と平和』と誤訳し、それが堂々とまかり通っているという世界的珍事なのだ。

ところで、叙述の中で、アンドレイの領地禿山に彼を訪ねたピエールが門前で出会った女巡礼の話に、「……靈驗あらたかな御像、聖母マリア様があらわれなすつた……聖母マリア様がお見えになり、信ぜよ、されば、汝の目を癒さんと申された」(第五編一三)。

「ポロチノ大会戦のとき、陣地での祈禱式で、奉持したスモレンスクの聖母マリア様の聖像に向つて、おお神の母よ、汝のしもべらをわざわざいより救いたまえ、と補祭たちが歌う……司祭により式がはじまる……将校や兵士や民兵たちが数知れないほど沢山、聖像をとりまいた。……祈禱が終ると、総司令官クトゥーゾフ將軍は聖像にあゆみより、うや／＼しく跪坐して頭を地に垂れた」(第一〇編二一)。

この聖像(イコン)とはキリスト教の教えにかかわりをもつるもろの諸聖像、つまりイエス・ハリストス(イエス・キリスト)はじめ聖書のなかの神々や、初期教父聖人たちを板切れに画いたものを崇拜の實質的対象物とするのであり、この点、西ヨーロッパなどで石や銅とか木造の彫刻偶像を實質的崇拜対象物とするのと対比して面白い礼拝具考であるが、その道の専門家に任せる。

聖像はふつう教会の中とか家庭の居間の片隅に安置されているのだが、この小説では戦線退却で却火に焼けたスモレンスク教会から持ち出されたものであった。

ところで、聖像の中で圧倒的に多いものは、幼児たるイエス・ハリストスをかかえた慈愛あふるる聖母マリアの聖像である。そして實質的信仰対象はイエス・ハリストスでなくて、右のように聖母マリアに対してであるのは何としたことだろうか。もつとも、そう訊ねると反論するだろう。あの聖像に描かれたイエスは幼児でわれわれ

の願いをまだ理解できないから、聖母マリア様が代わってききとどけて下さるのだと。ならば、そんなまだるっこいことをせず、立派な青年たるイエスス・ハリストス像を描いたらよいではないか。そして母への尊敬と慕情にみちた目で老婆マリアの手をひく像があるべきだと思うが、いまだかつてそのような聖像にお目にかかったことがない。もつとも、宣教をはじめたイエススは聖書の記述によれば、実母を見捨てるけわしさがあつたから、手を引いてやるなどは教えに反することになる。ある意味ではまことに親不幸なイエススなのだが、これも聖書の記述によれば、彼の刑死後、実母マリアは息子の宣教の旅に立つているのだ。何と、海よりも深い母の愛であることよ。ここに遊牧民族としてのきびしい神と農耕民族としてのやさしい神(？)のふれあいがある。聖書の諸断片は別として、たとえばシナイ写本などまとまった最古のものさえ四世紀以降である。ローマの地中海式牧場型農耕社会に布教定着してから多くの年月をかけているので、その間に現地の土俗習慣と習合した記述も多数あると推測される。これなども両者を妥協させようとした努力のあらわれではないだろうか。

話が横道にそれたが、いづれにしても、聖像としては聖母マリア像が圧倒的に多いことはロシア正教会の特色といえよう。

つぎは『復活』。この小説は、若きネフリユードフ公爵がたまたま陪審員をつとめた裁判で有罪を宣した娼婦マースロワが実は初恋の相手カチューシャだったことを知り、良心の苛責にさいなまれ、その償いを決意するにいたるというものである。ここではカチューシャが収監された監獄の教会堂礼拝式の模様がことこまかに叙述されているが、ここでも聖母マリアに対する礼拝だけである(第一編三九)。

この小説は前者とトーンが異なり、教会や宗教について、別人のごとく、ずけずけ批判を出していることが注目される。だから、この小説の反響は大きく、世間にごうごうたる論議をまきおこしたし、高名なるトルストイであ

るとはいえ、ロシア宗務院も反省してくれることを念願して、この小説完結後の一九〇一年に彼を破門した。しかし、彼は修正削除の要求に応ずる意志なく、一九一〇年この世を去った。だからヤースナヤ・ヴォーリアナにある彼の墓は当時としては珍らしくも十字架がない。

かくて、文学的能力と意志を貫いた偉人といえる。

さて、『復活』そのものについての私見だけを述べれば、小説の門外漢としての感想なのだが、帝政ロシア末期の矛盾した社会事情が良くわかる好個の素材ではあるが、正義感が先走り、あまりにも過激な言辞が多くていただけでない。事実、世界の読者がこれに対し毀誉褒貶に二分され、評価が定まらない。トルストイの晩節を全うしたともいえ、汚したともいえる。

む す び

最後に、チェーホフについて少しふれる。彼の戯曲『桜の園』『三人姉妹』を読みかえしたが、関連のことがらは出てこなかった。だが、考えて見ればうなづける。これはロシア上流階級のことを扱っているからだ。彼らの日常会話フランス語、ドイツ語やラテン語でみたまわっていることは、右の三大文豪の諸著作を見てもわかるとおりである。それは日常会話のみならず、思想的にも西ヨーロッパの自由主義にあこがれ、それを生活倫理として支持している者も少なくないからである。この一部は亡命インテリゲンチヤとして母国に新時代の息吹きをふきこむ一要因となったこともたしかである。だが、大部分は諸著作にもあるごとく、没落階層として土の中に消えゆく運命にあった。

これに対し、一九世紀ギリシャ正教思想、正しくは神の母マリア崇拜はロシア農民大衆の生活倫理として力強く生きつづけたし、それは現在も生きているものごとくである。ロシア文豪の諸著作を通じて、はからずも、没落上流階層と農民大衆の思想的断層、乖離を見た。